〔曲 名〕Quadretti d'Etiopia

エチオピア小景

1 Ronda Tigrina

小虎の彷徨

2 Sul Lago Tana

ターナ湖にて

3 L'Oasi

オアシス

4 La Carovana

隊商

〔曲 種〕

〔作曲者〕Vincenzo Billi

ウィンチェンツォ・ビルリ

〔編 曲〕Jiro Nakano

中野二郎

今年初頭私は高橋功氏から、イタリア・シエナのマンドリン合奏団の指揮者アルベルト・ボツチが編曲したマンドリン合奏曲の編曲リストを頂いた。

その多くは一般著名曲の編曲であったが中にD.Berrutiの乱暴な巡視、夏の夜、とかV.Billiの祈り、夜の鐘、小組曲アフリカ小景と云う未知の曲があり

原曲を知りたく大凡その出版社を想定して註文しておいたところ之が奇妙に当って半年も経った9月に入って組曲のみがピアノ譜で入手出来た。

それが本曲エチオピア小景そのてある。

小虎の彷徨、ターナ湖にて、オアシス、隊商の四つが組合わされていてそれそれ特色があるので編曲してみた。

ビルリの手法としては格別目新しいものではないが題材が面白い。
楽譜の表紙には四つの絵が描かれて、余り上手ではないが内容を窺うに便利である。
第一楽章「小虎の彷徨」はアフリカならではの風景であるが曲想に格別の新味はない。
夜、親を見失ってあちこち彷徨い歩く小虎を表現したものてあろうが、出来ればフェルトのビックでやってみたい。

第二楽章「ターナ湖にて」は最も特色がある。
昨年ノルウェイの人類学者ヘイルダール博士がアフリカのパピルス舟で南大西洋を横断したことは我々の記憶に新しいが、
このパピルスを刈取ったのがエチオピアのターナ湖である。
博士がこの計画に先立って検分の為にターナ湖に赴いた時の印象を次のように述べている。
「夕日は静かを湖面に一条の光をさしかけ、そこにはパピルス舟の小さな群れが、過去の影のようなシルエットになって漂い動いていた」と。
エチオビアは殆とが標高2000メートル以上の高地を占め、飛行機の利用が出来るまでは永い間世界の文明から隔絶された天地で
其処の湖は凡そ我々の想像を越えた様相のものであることに間違いない。
私はこの曲にも過去の幻影のようなものを感じる。
従って主旋律をリユートの第一弦の裸線の音にしたい。

第三楽章「オアシス」は単純な構成ながら我々に休息を与える。
オアシスは云うまでもなく砂漠の中で水が湧き、樹木の繁茂している沃地で隊商の休息するところ。
やきつくようを熱砂とギラギラ輝く太陽の下に広漠たる砂漠を横切る隊商にとってオアシスはまさに楽園、
青い草、丈高い椰子、あちこちに駱駝がその疲れを休めている。
太陽は既に地平線の彼方に沈み限りなく広く続いた青い空には一ぱいに散らばった星が瞬いている。
彼らの天幕からは母国の歌に故郷を偲ぶ哀愁が流れかくて砂漠の夜は次第に静かに更けてゆく。
主役をチェレスタにした。
マンドリンの代奏では心もとない。

第四楽章「隊商」この題材を捉えた曲は頗（すこぶる）る多い。

殆んどが遠くから次第に近づき、やがて遠く去って行く叙景で本曲もその轍を踏んでいる。

アラビア風の音階でもないのて格別異国風なものは感じないが、イタリアは19世紀末エチオピアに侵攻して失敗し、

今世紀に入ってムッソリーニ時代に攻略して数年間統治したことがあるので足跡豊かな作者のことであるから現地に赴いたこともあるであろうし、

従軍したことも考えられる。

作者が逝いたのは1938年で本曲の出版を見たのは1936年であるから後期の作品で作品番号は記されていない。

イタリアマンドリン百曲選第８集より